

## 縄へ移動の折残留

残留城子溝第一二〇師団三〇六部隊速射砲中隊に  
編成南朝鮮沿岸警備中 二十年八月 終戦抑留

昭和二十三年七月 復員

## 抑留の日々脳裏去来す

抑留より解放され舞鶴港に上陸してより五十有  
余年を過ぎて、何の資料も持ち合わせなく、ただ  
記憶を呼び起こしつつも細部については忘れ去っ  
たことの方が多く、お読みいただくほどのことも  
書けず慙愧にたえず御寛容のほどを願います。

大正四（一九一五）年十二月、北陸の河口につ  
くられた港を持つ小さな町に生を受けた。

家族は祖母、両親、兄三人、姉二人あり、六番  
目の子である。後に妹三人、第一人が生まれ、十  
人兄弟姉妹であった。父の職業は回船業であり、  
各種保険の代理店を営み、町の議会議員を五期勤  
め、昭和七（一九三二）年六月、五十三歳の若さ  
で病没した。

私は昭和八年三月、商業学校を卒業したが、当  
時は不況のさなかであり、大阪、東京と奉公先を  
転々とし、昭和十一年の徴兵検査に第二乙種合格  
となり、当分入営がないとのことにて意を決して

財団法人全国強制抑留者協会主催、富山県支部富  
山市民プラザでのシベリア抑留展示会に井波町文  
化センター抑留の苦勞を語り継ぐ会、井波町立中  
学校、庄川町立小学校、高岡市立中学校と抑留当  
時の苦勞を戦争知らない人に語り継ぐため支部協  
会の活動に奔走され、期待している。

（富山県 山田 秀三）

## 我が応召抑留の記

富山県 中村 嘉郎

国の為と説きつ説かれて望郷の  
抑留の日々堪えるも空し

誰が為か誰が故なるやシベリアの

同年九月単身にて福井県敦賀港より現在の北朝鮮の清津港に向かい、当時建国直後の満州国瀋江省牡丹江へと目指す。

同年十一月、寧安県公署雇員に採用され、牡丹江弁事処に勤務することになり税務関係の業務に従事する。

翌年十二月に牡丹江に市制が施行され、新庁舎において執務する間もなく、満州国産業部水力電気建設局の職員を拝命し、吉林市郊外の第二松花江大豊満ダム建設現場に入る。

後に新京本局に転勤となる。

昭和十九年四月、水力電気建設局と満州電業株式会社と合併したので大半の職員が会社の職員となる。私は新設の水力電気調査処に残留する。

同年七月同僚に召集令状がくる。彼は電源調査のため興安嶺方面に出張中にて電信電話による連絡がとれないので、私が呼びに行くことになり現場へ出向く。現場に着いてみると一足違いにて帰任した由にて私も急ぎ新京（長春）に戻る。

「中村君にも召集令状がきている」と知らされたとき、我が人生の終わりを覚えた。

日本の前途はかなき暗示あり

我が応召は夜逃げにも似て

盛大な見送りもなく奉公袋さえ風呂敷にくるんで汽車に乗り込んだものである。

入隊先は三江省斐徳二二三部隊（自動車隊）、隊の大半は南方に移動していた。召集された我々は満州各地で就労していた高齢者がほとんどであった。残留部隊の主軸は広島県人であり、毎日の訓練はもちろん軍人としての基礎的なことであり、時折、自動車整備、操縦等の教科があり、訓練の名目のもと丘に埋蔵してある燃料を駆まで運び南方へ送ることであった。

しかし昭和十九年、すでにソ連軍の進攻に備え谷間の両側面にざんごうを掘ること自体が訓練であった。

北満の宮庭暗き巡察日

怪火信号今日も上りぬ

時には歩哨に立ち、真つ暗な営内を一人で巡視する時の不安と怖きは生きることへの執着であつたのか。怪火信号が上がると小部隊が直ちに犯人逮捕に出動するが、犯人の判明したことは皆無であつた。

昭和二十年一月、陸軍一等兵となる。同年二月十四日付にて濱江省寧安九九六部隊（航空通信隊）へ転属を命ぜられる。この隊ではモールス信号の教科が大部分であつたが、修得しにくいことが多かった。幸いにも私は隊の事務室勤務を命ぜられ軍事訓練にはほとんど参加しなかつた。

昭和二十年七月一日、陸軍上等兵となる。同年八月、ソ連の侵攻により部隊は南下することとなる。

軍用の車両編成ままならず

避難者同乗部隊南下す

普通列車に乗り寧安―牡丹江―横道河子―ハルビンへと向かう。

牡丹江駅にて東北満より避難してきた婦人子供

等が乗り込む。

敗走の軍服の身に子を委ねたしと

懇願したる氷見の婦人あり

車中にて氷見なまりの話し声を聞き、なつかしく思い話しかけると、右記のように二人の乳幼児を伴い退避してきた女性に幼児一人を連れて内地へ帰るよう頼まれるも、この身軍人なれば涙こらえて断る。このこと未だ心にかかることなれど安否をたずね得ず余生を生きる重荷となっている。

ハルビンよりは無蓋貨車となり、時には雨に打たれながら新京―奉天（瀋陽）を経て安東に向かう途中、鳳凰城なる地にて下車し仮泊する。

南下中鳳凰城に終戦の

詔勅ありて言葉失う

これよりはまさに敗残の兵なり。安東にて武装解除とのことにて、徒歩により安東を目指す。私は足を病み歩行不自由なる熊本県出身の上等兵に付き添い二人のみにて本隊より離れ安東を目指す。もちろん二人とも三八式歩兵銃には実弾をこ

めている。途中住民に襲われることを想定するとともに万一の場合は自決も覚悟をしていたものである。

早朝ようやく安東にたどり着くも本隊の行く先も分からぬまま駅前においてしばし思案にくれていると、日本の巡視兵の目にとまり、ようやく本隊に合流することができた。

安東で武装解除され貨車により逆送されることとなる。このとき内地帰還の望みは絶たれた。途中奉天近辺で仮停車したとき残留の日本人より湯茶の奉仕をうける。

停車中日本娘ら男装し

悲哀まるこで湯茶そそぎけり

暴徒のごときソ連兵に襲われる危険があるので、若き娘たちは断髪し男装して奉仕してくれたのである。あの時いかなる思いで彼女たちの奉仕を受けたらうと今思うとき涙せを熱くする。

新京郊外に停車中には脱走をすすめる者もいたが、よらば大樹の陰とかで部隊にとどまることを

決意した。列車は北上し孫呉の近辺で停車する。孫呉には関東軍の糧秣庫があり、各自それぞれに何らかの食品を貨車に持ち込むよう指示される。

糧秣庫にはソ連兵が監視しており、庫を出る際には何らかの貴重品を差し出すよう要求する。

私は幸いにも指揮班の一員として隊長や經理担当の曹長等と同じ貨車に乗っていた。

そこへ寒さをしのぐため屋上にいたソ連監視兵が指揮班に入り込み話し込む。

行先は黒河にてアムール（黒竜江）を渡りブラゴエンチェンスクよりナホトカに向かい日本へ帰すと言う。それも半信半疑で、ブラゴエで列車が行先を東にするか西にするかにより命運が決まると覚悟する。黒河にて乗船するも波が荒いので運航不能、下船して翌日徒歩にてアムールを渡る。

鉄舟橋黙して渡るアムールを

希望見えざるブラゴエ目指し

生きる希望もなくただ黙々と歩くのみ、その中

ようやくにしてブラゴエの駅に着く。

寒さ凌ぎ街路樹を背に座しおれば

掠奪兵は手にマンドリン

彼らソ連兵は日本兵を見れば掠奪兵となる、手にはマンドリンと呼称していた小型機銃を持っている。彼らの意のままに私も大事にしていた腕時計を掠奪される。ブラゴエにて貨車に乗せられ発車する。進行方向は東か西か。

ブラゴエを発車の行手どこぞと

問えば西方希望失う

シベリアの広野を貨車は走ったり長時間停車したり、何の目的でどこへ行くのか。ウランウデを過ぎ貨車は外蒙方面に向かっているようである。

線路があるのかないのか、下車し徒歩にて進む。日没ともなれば適当な場所にて野宿させられる。食事の準備はその辺の溜まり水にて飯ごう炊さん、炊くものは米にあらず満州より運ばれ来たる馬糧コウリヤン、腹を満たし得るだけ幸いとする状況である。

翌朝、昨夜使用した溜池の水を見て皆愕然とする。水は汚れ、虫さえわいている状況である。

昭和二十年十一月二十日、ヴィンゴール（バインボール）収容所に入る。

ここには小さな炭鉱と堰堤築造作業が待っていた。私らの従事したのは川の氷を爆破し材木を組み立て、その間に岩石や大きな石を入れるための石や岩の運搬作業であり、まさに人海作戦の様相である。

厳寒に軍より支給のシューバーを着て大手袋をはめ、肩になるべく軽い石をのせて運ぶ。監視兵は馬に乗り巡察している。運ぶ石が小さいと投げ捨てさせ、より大きなものを運べと叱咤する。ある時はボール一本を与えられ氷に穴を掘る作業をさせられる。

一日のノルマとしては直径二十センチ、深さ五十センチ程度のものを一個掘ること。大手袋の両手にボールを挟み上から落とすだけ。氷はひびも入らず素知らぬ顔。掘らせた氷穴にダイナマイト

を詰め込み、氷を爆破するためのものである。外気温零下三〇度以下になると作業休止となり所内であつて気温の上昇を待つ。

このような作業中栄養失調で亡くなる者も多く、思い出されるのは隣のベッドで休んでいた同僚と故郷の食べ物自慢の話中、返事のこないのを不審に思い近づいて見るともう冷たくなり他界している。

これが栄養失調による死かと思ひ知らされる、本人は苦しむことなくこの世におさらばできるも、まさにこの世の地獄を見る感あり、口惜しい限りである。この兵の出身地は香川県で〇君と言つたかと思われるが、確たることは聞いていない。

昭和二十一年三月五日、ガラトックという場所のソフホーズ（集団農場）にてバレイシヨの植付けやキャベツの栽培に従事する。

一日のノルマとしては、植付け面積のときあり、種芋の量のときあり、収穫までの間には除草

の作業面積のときあり、種々雑多なノルマを課せられる。

除草のとき等、午後三時ころノルマを完遂し安心すると、まだ陽が高いからと、ここまでおいでとノルマを広げる始末、一同立ちつくして抗議するも承知せず。やむを得ず月が高く昇るまでストを起こしたこともあつた。

キャベツの植付けには水が欠かせないので各自バケツにて遠く離れた所にある川まで水を汲みに行き、監視員の言によれば一株に少なくとも缶詰の空き缶に一杯の水をやれという。そのとおりにすればバケツの水がすぐになくなるので各自苦心したものである。

農場の監視員はほとんどモンゴル系であつたが、中には教養のあるロシア婦人もいた。

モスコより流されて来るロシア娘の

監視のありて作業する我

月を指し日本にも有無たずねたる

モンゴル人の目は誇らしく

ソフホーズ畑飛び交うタルバガン

兵のスープになる身気付かず

名も知らぬ丘に葬る戦友に

明日は我が身と涙せし日も

農場の作業が終わりウランウデ収容所に移動する途中伐採作業あり馴れぬ馬を扱い苦心惨憺の日々。

伐採の作業終わりにラーゲルへ

田原坂なる歌唄いつつ

伐採作業の班長は肥後出身の下士官であり、我々を鼓舞するため、地元の田原坂なる歌を教えてくださいましたものである。ゆえにこの歌を唄うにつけて聞くにつけ当時のことがよみがえる。

昭和二十一年十月二十五日、ウランウデ収容所に入る。

この街には種々雑多な仕事があり、収容所自体の規模も大きなものであった。周囲は二重の鉄条網を張りめぐらし、所々に高台の監視所を設け絶えず兵が銃を構えている。作業は最も大きな機関

車工場あり、建築現場あり、駅や港の荷役仕事があった。大半は機関車工場内の雑役であり、時折は港の荷役に回される。

こんなシベリアの中心部に港があると考えられないが、近くにバイカル湖があることを思えばうなずける。

ウランウデ荷役作業に腰くたく

笑いささやく女性労務者

栄養失調ぎみの日本兵にとっては確かに重労働である。

私の二カ年に及ぶ抑留中の一時このようなこともあった。

それはスタジアムのスケート場造成のための注水ポンプの管理である。これは徹夜の勤務である、そして二人だけの勤務であった。一人は横浜Y高の先生であったF曹長である。ここの管理人は老夫婦であり、我々に同情的に接してくれ、時折は食物の提供を受けた。

信仰の自由認めぬスターリン

ニイハラショウと嘆く老婦あり

この老婦人は、自国民には言えないが、外国人たる日本人に対してだから嘆いたのだろうと推察したものである。

通訳を目指しロシア語研修し

スパイ祝されし兵あまたあり

つるはしを振るいモッコで運びだす

冬のラーゲルトイレの清掃

私が抑留時持ち入ったリングル注射液を見つけた女医

リングルの注射液手にソ連女医

二本三本飲みて笑みけり

平素の食事は班ごとに一括受領し班内にて平等に分配していたが、時折検査官の来訪日は個人個人がタロン券なる配給票を持たされ労働のいかんにより大量、中量、小量と配給されたこともあった。

通常の食事は雑穀をまぜ合わせて作った俗にいう黒パンであり、時には大豆が主食であったり、

大豆をスープ状にしたもの等であった。病棟に収容された者は普通の白い食パンが支給されたのである。

ラーゲル内での慰安といえは余技を持つ同僚の講談を聞く程度である。

この収容所内で奇遇あり、お互いにびっくりしたこともあった。

現役入営祝い送りし友人を

ラーゲルに見る班長の座に

彼は終戦五、六年前に現役入営し、その後除隊して民間人となっていたはずなのに！

聞けば奉天にて人狩りに見舞われ抑留された由にて、人間の運命のいたずらを思い知らされる。

彼も数年前に東京にて他界した由、残念に思い冥福を祈るのみ。

昭和二十二年五月、駅にて作業中ダモイ列車の通過を見送る。

駅作業ダモイ列車を見送りつ

我がダモイ日よ早く来たれと



その後、虚弱体質者とハラシヨラポーターを早く帰国させるとの風評があり、早期実現を祈っていた。

同年七月になり、いよいよ帰国が具体化する。

ラーゲル内の虚弱者とハラシヨラポーターと認定された体格の良い同僚と一緒にウランウデ駅を出発し、同月十日ころナホトカに到着する。

駅舎もなく砂浜近くに停車してみると港はもつと先とか。

ここでまた身体検査があり、体格の良い者が再編成され奥地へ作業しに行く。彼らのダメイは果たしていつごろであったのか私らは知る由もない。

ナホトカ到着後砂浜に設置された幕舎に収容され日中は軽作業に就かされる。

乗船日を問いただせば日本が船を回さないの何日になるかわからないという。乗船日まで毎夜のごとく集会場で行われる民主教育なるものに出席させられる。出席を拒否すれば残留になると言

われ、やむなく皆参加していた。

ナホトカの砂地の幕舎に起居すれば

民主教育今日も始まる

七月二十一日、待望の乗船日となり、港までの行進もさほど苦にならず、皆、心が浮き立っていた。帰国に際しての最終検査では紙片に書いたものはすべて没収される始末。乗船後、記憶のあるうちにとセメント袋を手帖型に折り畳み、友人の住所録等を作ったものである。乗船した船は永禄丸。

復員の船ナホトカを離れたり

心で叫ぶ万歳バンザイ

舞鶴港上陸に際し各自に三百円が支給されると聞き喜んだものである。この額は応召時の三カ月の給与に相当するものであるが、当時の日本の物価を知らない我々にとってはさもありません。帰路京都の本願寺において一泊し、友人と再会を約し無事故郷に着いたときは無一文であった。

七月二十四日、舞鶴港に上陸。

無事命永らえて日本の土を踏み得た感激は、体験した我々だけの宝物である。ただ命だけをと念じつつ祖国の港にマイクより流される「誰か故郷を思わざる」のメロディーに涙せんを熱くしたのは、ひとり私だけだっただろうか。人間の温情を慕いつつ夢に見た祖国に帰り来て、敗戦国の現状に鉄槌を見舞われ生きる苦しみを覚え、それにより人生を意識させられた。

齢八十八歳となり、この記を終わるに当たり、抑留中、種々御激励と御芳情をいただいた次の各位に対し、深甚なる謝意を捧げます。(敬称略)

小田原市 府川文吉 新潟市 井上三次郎  
東京都 大川豊吉 松山市 宮内章雄  
長野県 宮崎英一 大阪府 宮脇十美雄  
鹿児島県 港 敬二 山形県 長谷部庭次  
乞食の姿にも似し復員の

我を迎えて母言葉なし

かまど火に咽ぶか老の母の目は

涙で迎う復員の子を

#### 【執筆者の紹介】

富山県高岡市伏木町出身 大正四年十二月二日生まれ

父 中村新右衛門(伏木町議会議員五期)の四男

伏木商業学校卒業 満州開拓に希望を持ち渡満

昭和十九年七月 召集令状

昭和二十年八月 終戦 抑留

昭和二十二年七月 復員

財団法人全国強制抑留者協会主催富山県支部富山市民プラザでのシベリア抑留展示会に抑留当時着用防寒衣服肌着を持参展示された。

支部協会の活動に期待している。

(富山県 山田 秀三)